

東京支部ニューズレター

発行：2015年12月18日 発行者：日本カトリック看護協会（JCNA）東京支部

事務局：〒161-8550 東京都新宿区中落合2-5-1 聖母病院内（支部長、西村晶子）

Tel:03-3951-1111 E-mail:jcnatoukyousibu@yahoo.co.jp

<JCNA 東京支部長ご挨拶>

～広島大会に参加して～

JCNA 東京支部長 西村晶子

第57回JCNA広島大会は、130人を超える会員が集い盛会でした。カトリック新聞にも詳しく紹介されましたね、読んでいただけると嬉しいです。私の心に残っていることは、JCNA通信にも書きましたが、ここで二つの報告をさせていただきます。一つは、林神父様の「広島はそっと歩いてほしい」という言葉でした。広島は2回目の訪問でしたが、このようなことは初めて伺いました。この一言が、開会式のごミサでありました、このとき、大会は大成功だ！と直感しました。それは、広島の人々は、毎日この地で生活している、毎日そっと歩いて、被爆の体験を思い、再び戦争はしませんと誓っていると思ったのです。私は、山口支部長に、この言葉の重み、力、林神父様の、温かいお話に感動を覚えたことを伝えました。そうしたら「私は、この神父様がいたから、やってこれました」と瞬時の答えが返ってきたのです。益々嬉しくなりました。大会準備にあたって、広島にJCNAの会員はゼロでした、会員は山口、鳥取から通って来られ、数々の準備をされたのです。そこにはご協力いただいた、広島市の幟町教会の方々、ボランティアの方々の温かいご協力とご支援がなければできなかったことだと思いました。そして山口支部長の平和を希求する大会は、被爆地広島で、被爆70年の節目の年に開催しなければならないという強い決意のほどが感じられました。その決意は、最後の閉会挨拶にもありました。大会の成功を願って、毎日、聖母マリア様にお祈りされたということでした。私たち一人ひとりの行動が人々に理解され、共感を得られ、心が通い合うコミュニケーションの中で、喜びと、感謝と希望のうちに大会が準備され、成功をおさめられたと強く感じました。そして、JCNAの会員が増えるかどうかは、私たち一人ひとりの生き方が、どれだけまわりの方々に理解されるかにかかっていると思いました。

2016年はアジア・カトリック医師会総会が京都で開催されます。そのためにJCNAの大会はありません。2017年の大会は横浜支部が担当することになっております。この大会は、JCNA初代会長 井深八重さんの生誕120年に当たる大会となります。私たち一人ひとりが、今から大会の成功を毎日お祈りしたいと思います。大会を通して会員が増えていくことを願って、私自身頑張っていきたいと思います。よろしくお祈りします。

<第57回日本カトリック看護協会 全国大会 in 広島が開催されました>

参加された会員に、記事をお願いいたしました。



～全国大会 in 広島に参加して～

JCNA 会員 藤井 智恵美

2015年10月23日（金）24日（土）に広島で、第57回日本カトリック看護協会全国大会が開かれた。「平和への希求」一時代（いま）を生きる私たちの選択—というテーマで、被爆70年の今年、広島で開催された意味を初日の大会会場となった世界平和記念聖堂は1981年2月に「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。」と始まる教皇ヨハネパウロ2世の「広島平和ア

ピール」の場であり、マザーテレサも祈った場であり、平和の世界を希求する場である。また原爆の被災地となった広島での原爆の恐怖と今なお続く苦しみ・悲しみにある病む人がいること、あらたに東北の震災での福島原発事故の存在がある。今この時に、平和の実現に向かうため私たち看護者は何を選択し、訴え行動するのか、はっきりとした意思を宣言するという強いメッセージが大会長である山口郁乃氏の挨拶から語られた。

開会のミサを受け、その後の基調講話が2題あった。基調講話1は、広島教区管理者平和の使徒推進本部の肥塚倅司神父様が平和記念聖堂の歴史と、そこに建てられた「聖堂記」について、この聖堂を訪れたすべての人には原爆で亡くなられた犠牲者の永遠の安息と人類相互の恒久の平安とのために祈ることであることを話された。基調講話2は、広島教区宇部教会主任司祭の片柳弘史神父様は、「広島平和アピール」を題材としてキリストの平和について、隔ての壁は壊されて隔たりにない、皆神の子、愛されるに値する、平和を実現する。「聖書の言葉」からキリストの平和についてエフェソ2章14から16節を上げられた。夕方、原爆資料館を見学し原爆のもたらす現実を目の当たりにした。

2日目は、基調講演で「放射能の影響を考えるー広島から福島へ」と題して、八王子中央診療所所長の山田真氏から放射能の力、影響についての話を伺った。また山口裕子氏から広島での原爆体験を、次に福島の子もたちを招いて行う広島での保養キャンプの実践者である山口正人氏からその様子と今後の活動の新たな課題をお聞きした。最後に「カトリック教会と原発問題」として上智大学の光延一郎神父様が日本のカトリック司教団の脱原発メッセージやバチカンにおける原発についての立場やこれからの日本のカトリックとして反原発についての活動について、平和のための活動のネットワークを広げていくことを話された。

短い時間ではあったが、初日の世界平和記念聖堂、原爆資料館の見学、2日目は直接原発に関連した実体験や福島の現実を通して改めて原発反対の強い意思を新たにするとともに、広島は街はそっと歩いてくださいという地下からの声に静かに、しかし力強い平和への希望と使命を新たにしたい。そして、大会運営に当たって、初日の広島駅での「JCNA」の看板をもって案内くださったことに始まり、大会関係者の方々の細やかな心遣い、しなやかな温かさが身にしみ、その姿に「看護の原点」を思い重ねた大会であった。

(2015.11.1 記)

<顧問司祭バレンティン・デ・スーザ師の記事>

以下にご紹介させていただくのは、2012年6月15日に発行された、聖母病院の聖母ニュースに掲載された記事、「チャプレンからのメッセージ～日本（人）の素晴らしさ」です。JCNAの全国大会に参加して下さったバレンティン神父さまが、この大会で福島の現実に触れ、聖母ニュースの記事を思い起こし私たちに伝えたいと思って下さったこと、感謝です。ご了解を得て、このニューズレターに転記させていただきました。

～日本（人）の素晴らしさ～

バレンティン・デ・スーザ師

1年のサバチカルを終えて聖母病院に戻り、最初の「聖母ニュース」のため、ペンを取りました。外国にいる間、感動したことは、世界中どこかの国に行っても、日本の地震と津波のことに興味をもっていただけでした。そして「日本のことについて話してください」と頼まれ、私が見た現状を話しました。

地震のすぐ後、インターネットの英語版では、日本と日本人の素晴らしさを報道していました。そこで簡単にこの文章を10項目にまとめてみたいと思います。

1、静けさ（穏やかさ）Calm

深い悲しみを、泣き叫んだり荒々しく態度に出すことなく、静かに受けとめている姿。

悲しみをそのまま偉大なものとして受けとめた。

2、尊厳、品位、Dignity

皆、我先にと争うことなく、騒がずに列にならんで水や食物を受け取っている。

3、能力 Ability

日本の手腕、技術の素晴らしさ・・・

高層建築は揺れたが、壊れて崩れなかった。

4、たしなみ、上品、礼儀正しさ Grace

いろいろな物を、自分の必要な分だけを取り、あとに来る人のために残しておいた。

(オイルショックの時のトイレトペーパーの買い込みとは正反対)

5、規律 Order

あわてずに静かに、規則正しく物事を行う。略奪や盗むことがなかった。

6、犠牲、Sacrifice

大勢の人達が、原発事故のため、自分の危険をも顧みず業務を遂行した。

7、柔らかさ、優しさ、Tenderness

食堂、レストランが値下げをして、できるだけ多くの人に食べさせようとした。

流されたATMを誰も触れずにそのままにしておいた。健康な人が、弱ってる人を助けてあげていた。

8、訓練 Training

お年寄りから若い人まで自分の立場を心得、何をするか、何をしていくか行動に移していた。

9、マスコミ Media

テレビ、新聞、雑誌におけるマスコミは、控えめに冷静に事実を伝えていた。しかし外国では人の気を引く (sensationalism) 報道であった。

10、良心的 Conscience

買い物中、突然停電になったとき、皆が物をそのまま置いて、静かに店から出た。



日本の被害をマスコミで見ていた世界中の人々は、非常に心を打たれ感動しました。当たり前として、慣れてしまう私たちは、この 10 項目を大切にし、育んで進んでいく必要があるのではないのでしょうか。また、この 10 項目にこだわらずに、自分でよいと思うことは進んで行動に移していきましょう。

<上智大学でのコミットメントセレモニーの式典>

～上智大学総合人間科学部看護学科コミットメントセレモニー～

上智大学総合人間科学部看護学科 塚本尚子

上智大学看護学科は聖母大学 60 年の伝統を引き継ぎ、総合人間科学部の 5 つ目の学科として 2011 年に開設され、今年で 5 年目を迎えました。3 月には、待望の卒業生を社会に送り出すことができました。

上智大学は教育の基盤にキリスト教ヒューマニズムを据え、「他者のために、他者とともに」という理念のもと教育を行っています。看護学科は、自らの手を通してこの理念を具現化し社会に貢献する専門職を育成するという、大きな期待と使命とを持った学科であります。コミットメントセレモニーは、看護職として歩んでいく決意の象徴として、司祭によって手の祝福を受け、これを記念する式典として開設時より行ってきました。今年 9 月 26 日に聖イグナチオ教会大聖堂において、佐久間勤神父様、フィルマーシャー神父様司式のもと、4 期生である 2 年生が、プロフェッショナルの道を歩むことへの決意をいたしました。今年もたくさんのご来賓、ご家族がセレモニーにご臨席下さり、学生達と共にこの日を喜び、お祝いしていただきました。

看護の中核概念は、ケアリングです。そしてケアリングの目指すところは、どんな状況にあっても、相手の尊厳を守り尽くすということだと思います。本学看護学科の学生には、いついかなる状況に置かれても、対象となる人々の尊厳を守るために必要なことを考え、行動できる看護職となって欲しいと願っています。このコミットメントセレモニーを通じて、学生一人一人が「生涯ケアをする人であろう」とする意志を固め、プロフェッショナルとしての洗練された技術と深い知識を身につけるための努力をたゆまず続けていくことを誓う、そのような場となることを目指しています。

今年のセレモニーでは、これからの学生たちの長い学びの日々を支えるためにメイヤロフの言葉を贈りました。「ケアというものは、使って使いきれぬ程度の一定量しかないというものではない。むしろケアとは、それを実践することによって絶えず新しくなり、発展していくものである。」ケアする力は、滾々と湧き上がる泉のようなものだと思います。学生たちはすでにその源泉をたくさん神様によって与えられています。それは彼らに命を与え、慈しみ育て、生涯にわたり無償の愛で見守ってくださるご家族の思い、プロフェッショナルへと導き育てて下さる実習施設のみなさまの思い、そして病の時を学生の学びのために分かち、その未来を期待し育てて下さる患者様の思い、上智大学の教職員の思い、さらには共に学ぶクラスメイトの思いです。学生が自分たちの中にある、これらのケアの源泉に気づき、感謝をもってこれからも歩みを進めていけるように、そしてやがて日本の、世界の保健医療の一粒の種となって社会に貢献することができるように願いながら式典を終えました。コミットメントセレモニーを終えた2年生は、現在1月の病院実習に向けて、学習に技術の演習に邁進しています。今後とも学生たちの看護職としての学びの道に、神様のお恵みがたくさんありますように、共にお祈りいただければ幸いです。

<クリスマス、おめでとうございます>

～毎日がクリスマス～

T.H

12月25日のクリスマスは近づきました。御子さまのご降誕を思い起こす祝日ですね。マリアさまへのお告げに始まり、この天使のことばをマリアさまは「おことばどおりになりますように。」と受け取られ、御子さまが誕生されました。教会では、朝・昼・晩とお告げの鐘が鳴り響き、「お告げの祈り」が唱えられます。毎日御子さまのご誕生を喜ぶのです。

このことから、Sr. 渡辺和子は、「毎日がクリスマス」だとおっしゃっています。(心のともしび第668号) 確かに、毎日毎日私たち一人一人の心の内に、御子さまは誕生してくださるのです。そして私の内に生き、行い、愛してくださるのです。このことを意識できるかどうかは、私たち次第です。

クリスマス、おめでとうございます。

<お告げの祈り>

主のみ使いのお告げを受けて、
マリアは聖霊によって神の御子を
やどされた。

(アヴェ・マリアの祈り)

わたしは主のはしため、
おことばどおりになりますように。

(アヴェ・マリアの祈り)

みことばは人となり、
わたしたちのうちに住まわれた。

(アヴェ・マリアの祈り)

神の母聖マリア、わたしたちのために祈ってください。
キリストの約束にかなうものとなり
ますように。

祈願

神よ、み使いのお告げによって、御子が人となられたことを知ったわたしたちが、キリストの受難と十字架通して復活の栄光に達することができるよう、恵みを注いでください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

